

# 岸の風

December 2025 vol.307



寄付のこと  
今できる  
未来に託す、

特集 想いをつなぐ～変化を生み出すチカラ



SHAPLA NEER

# プロジェクト最新情報

シャプラニールは、1972年に設立された南アジアと日本で貧困問題の解決に向けて活動する国際協力NGOです。「すべての人々が持つ豊かな可能性が開花する社会」の実現をめざし、児童労働の削減、災害に強い地域づくり、フェアトレードへの取り組み、多文化共生社会づくりの推進を行っています。

※情報は2025年10月時点

## 1 学校、地方行政、地域の力で児童労働の予防と削減 児童労働

2024年度に各校で策定した学校児童保護方針の改善や共有が学校ごとに継続的に行われている。また、養護教員向けに社会性と感情に着目して、子どもたちの「生きる力」を育むための研修を行うなどして、学校の保護機能を高めている。この研修には、支援対象の21校以外の養護教員を含めて計53名が参加し、連続開催の要望も多く反響が大きかった。



## 2 水害リスクに強いコミュニティづくり 防災

集落単位のコミュニティ災害管理委員会で住民が集まって定期的な情報や経験の共有を行うだけでなく、避難訓練、防災がテーマの路上劇を実演するなどした。コミュニティ災害管理委員会で出た意見を区や市に住民が申請するなど、住民と地方行政の連携や地域住民の自立的な動きが強化されつつある。

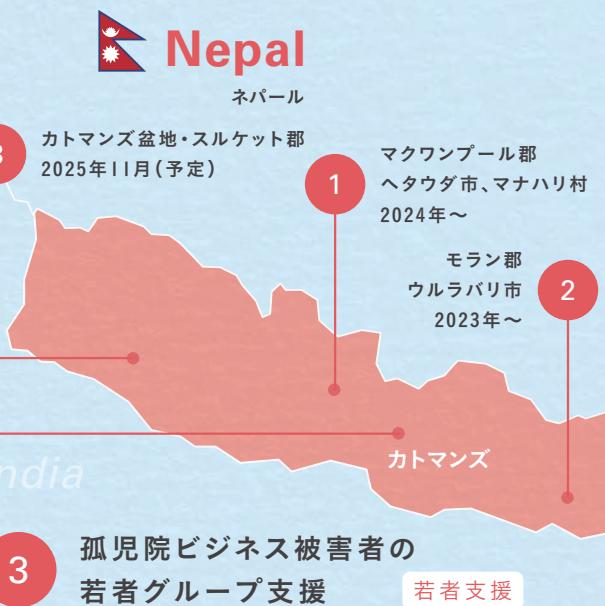


## Japan

東京都新宿区大久保  
2022年～

## 多文化共生社会をめざす取り組み 多文化共生

多文化共生コミュニティスペース「マザリナ」で、外国ルーツの方のお話会＆ネパールダンスワークショップを実施。文化やネパール人講師の背景を学んだうえでダンスを通して言語を超えた楽しい交流ができた。日本語学校の学生にとって、日本で暮らす先輩に就職の相談をするなど新たなつながりを持つ機会ともなった。



## 3 孤児院ビジネス被害者の若者グループ支援 若者支援

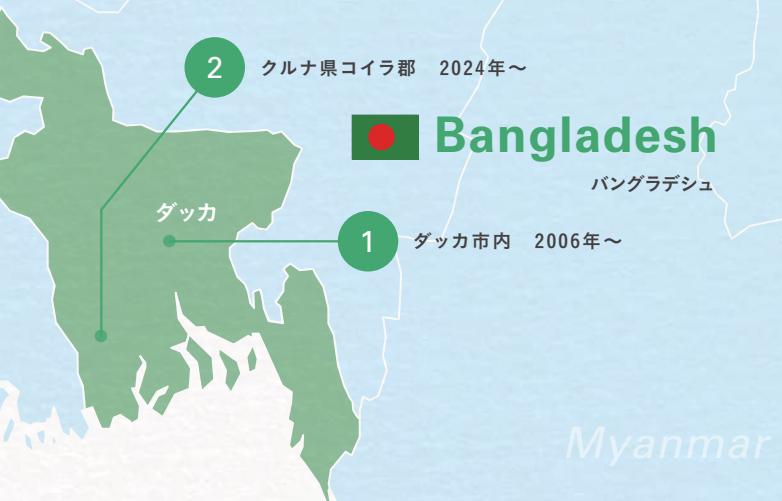
孤児でないにもかかわらず孤児院に入れられる子どもがいるといった現状を、国内外に発信するための活動内容を孤児院で育った経験のある若者らと計画した。孤児院で過ごした経験のある若者のストーリーを収集し、社会に発信していくこと、国際会議への出席を決定した。



## China

## 1 家事使用人として働く少女支援 児童労働

センターに通う少女の多くが出身の村で保護者たちと、子どもの権利や都会で家事使用人として働く少女が直面する課題について話し合った。保護者からは、経済的困窮などから生きるために娘を働きに出さざるを得ない事情が共有されたが、「今後は働きに出さないためにできることには積極的に参加したい」という意見も確認できた。



## 2 ジェンダー視点による地域防災力の強化 防災

2024年度に支援した地域のトイレ、井戸、雨水収集給水システムが適切に維持管理され、洪水時だけでなく日常生活の中で村人に使用されていることが確認できた。コミュニティの共有財産となっている。8月には、それらの維持管理のフォローアップ研修を行い女性49名が参加した。



## 3 フェアトレードへの取り組み フェアトレード

南アジアで身近にある素材や暮らしに息づく伝統を大切にした物づくりを通じ、生産者の生活向上をめざす取り組み。原料の見直しで時間を要していたオリジナル石けん「Sheソープ」の本制作、再販までの最終調整を行った。また新しいパートナー団体ポリ・クラフトのノクシカタ刺しゅう商品の販売を開始した。



## INDEX

- P2 プロジェクト最新情報
- P4 特集 想いをつなぐ～変化を生み出すチカラ
- P5 つながる想い～現場からのことは
- P6 次世代へ想いをつなぐ仕組み「遺贈寄付」とは
- P7 2025年度 新任役員のご紹介
- P8 クラフトリンク いよいよ She with SHAPLA NEER 販売再開！
- P9 シャプラバ！ ボランティア 橋本 善子さん
- シャプラ文化部 あまへいヨーグルト
- P10 涙と笑いに満ちた激動の7年間 前バングラデシュ事務所長 内山 智子
- P11 シャプラ掲示板・事務局だより

## シャプラニールとは

「取り残さない、その小さな声を。」

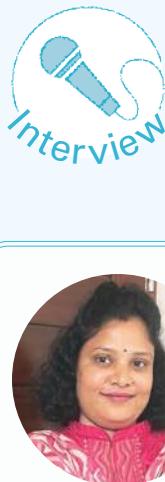
戦争や大規模な自然災害など、多くの人々を苦しめる事件の裏で日々の暮らしのものに困難を抱えている人がいます。

そういった声なき声をすくい上げ、一緒に感じ、考え、行動し少しでも明日に希望が持てるよう、ともに歩んでいくこと。

それがシャプラニールの考える「誰も取り残さない」という精神です。

## 南の風 通巻307号(季刊)

2025年12月発行  
発行人 村山真弓  
発行 認定NPO法人シャプラニール  
=市民による海外協力の会  
編集長 藤岡恵美子  
編集 勝井裕美・高階悠輔・長瀬桃子  
デザイン 柴田篤元  
印刷 株式会社上毛印刷



# つながる想い～現場からのことば

バングラデシュ、ネパール、日本で活動にかかわる3名から、活動を通じて自身に生まれた変化をご紹介します。



ジョバさん  
支援センター参加者  
(2011年～2019年)



## 経験と学びを少女たちに伝える

10歳になる前、親戚にダッカへ一緒に行こうと誘われ、都会に遊びに行くだけと思っていたら、家事使用人として働くことになりました。外出する機会はなく、学校に行かせられませんでしたが、村に暮らす弟と妹の学費のために仕事を続けました。2011年に支援センターに通いはじめ、読み書きや計算、刺しゅうやミシンの研修も受けたことで、私にもできることがあると自信がつきました。2019年には、結婚をして家にいた私に「センターで働いてみない?」と声をかけてもらい、「使用人」ではなく「勤め人」になったことがとても嬉しかったです。かつての私と同じ境遇にある少女たちに、勉強と貯金は将来生活していくうえで大切であることなどの自分の経験を伝えています。今はオンライン販売のサーに刺しゅうを施す仕事を請け負っていますが、将来は自分のお店を持ちたいと思っています。

バングラデシュでの家事使用人として働く少女の支援



特集

# 想いをつなぐ～変化を生み出すチカラ

## 生まれ育った地元へ貢献したい

ヘタウダ市19区で子どもの権利にかかわる人々へ働きかけを行うソーシャルモビライザーとして、子どもの家へ訪問したり、学校に立寄り話を聞いたりするアウトリーチ活動(支援が必要な人に情報や支援を届ける仕事)をしています。ここでは道路や交通機関が整っていない地区もあり、学校まで遠く、通うのを諦めてしまう子もいます。19区は広く、回って歩くのは大変ですが、児童労働をなくすために地域による差がない、きちんとした教育を届けたいと思っています。子どもたちは年齢が近いので、彼らも気軽に話しかけてくれます。そうした彼らが学校に通い続け、幸せそうにしているのを見ると、自分自身も満たされます。これからもこの生まれ育った19区に貢献していきます。

ネパールの地方部における児童労働予防と削減



クリティカさん  
ソーシャルモビライザー



ソバさん  
「マザリナ」参加者



## 私にも娘にも居心地のよい場所で

日本に住み始めた頃は、日本語をほとんど話せず、周りに知っている人が誰もいなくて寂しかったです。日本語が少しわかるようになっても意味を理解できず、自分が言いたいことがあっても伝えられませんでした。多文化共生コミュニティースペース「マザリナ」には、私の話す日本語が間違っていても、私の言いたいことを理解しようしてくれる人々がたくさんいます。マザリナは楽しく、困ったことを相談できて、子育ての事も話せる自分を受け入れてくれる場所です。娘にとっては、初めての人を怖がらなくていいことを知ったり、いろいろな人と会える場所にもなっています。周りのネパールの友達にもマザリナを紹介しています。来てくれたらしい場所だってわかつてもらえると思います。

日本での多文化共生社会をめざす取り組み

私たちの活動は、一人ひとりの「想い」によって支えられています。貧困や差別のない社会を願う気持ち、遠く離れた誰かの未来を案じる気持ち、そして「自分にできることをしたい」という気持ち。想いを持って活動に協力していただいている読者の皆さんに改めて感謝申し上げます。

バングラデシュ、ネパール、日本の活動の現場では、子どもたちや女性たち、そして事業にかかる人々が、新たな機会や学びを得ることで自らの可能性に気づき、新たな変化を生み出そうとしています。また会員、マンスリーサポーター、寄付やボランティアなどを通して支えてくださる皆さん

本特集では、活動を通じて変化を広げようとするバングラデシュ、ネパール、日本の3名の想いを、そして次の世代へ想いをつなぐ仕組み「遺贈寄付」についてご紹介します。

一人ひとりの想いがつながり、シャブナールの活動は半世紀を超えて続いてきました。つながりはやがて大きな変化をもたらします。現場からの「変化」の声と、次の世代に想いをつなぐ遺贈寄付について、ご紹介します。

文／支援者コミュニケーショングループ  
高階 悠輔

も、「世界を少しでも良くしたい」という願いを胸にご支援、ご協力いただいていると思います。それぞの場所は離れていても、確かに一人ひとりの想いは繋がっています。活動を始めた当初からご支援くださっている方の中には、ご逝去された方もいらっしゃいます。それでもお子さんが「父／母が長年にわたり支援してきたことを私も引き継ぎたい」と、会員やマンスリーサポーターを継承してくださる方もおられます。最近では、遺贈寄付の仕組みも社会的に徐々に広がってきており、遺産の寄付をご相談いただく機会も増えてきました。そうした想いは、時間を超えて人々の暮らしを支え続ける力となっています。

本特集では、活動を通じて変化を広げようとするバングラデシュ、ネパール、日本の3名の想いを、そして次の世代へ想いをつなぐ仕組み「遺贈寄付」についてご紹介します。

# 2025年度 新任役員のご紹介

2025年度会員総会にて、新たに代表理事・理事・監事・評議員に選任された皆さまから、会員・マンスリーサポーターの皆さまへのメッセージが届きましたので、ご紹介します。



## 代表理事

村山 真弓 (南アジア研究者)

私が共感する現地の人々に学び自己を見直すというシャプラニールの姿勢は今も変わっていません。他方、南アジアも日本も状況は大きく変化しています。共に生きるために、私たちが今、何をすべきか。皆さんと一緒に考え、未来を紡いでいきたいと願っています。



## 理事

齋藤 百合子

(大東文化大学国際関係学部特任教授)

1980年代にシャプラニールとのかかわりが始まりました。現在は大学で教鞭をとるほか、人身取引問題や在日移住女性との多文化共生、日本の若年女性の性的搾取に反対する活動などに携わっています。国際協力の醸成とジェンダー平等と人権を大事にしていきたいです。



## 理事

田中 政行 (ボランティア、会社員)

ボランティアとして約18年、クラフトリンクやステナイ生活、各種イベントに携わってきました。私にとってかけがえのない存在であるシャプラニールへの恩返しも込めて、草創期から活動してきた方々と新しくかかわる方々をつなぐ役割を担えたらと思います。



## 監事

上原 優子 (立命館アジア太平洋大学  
サステナビリティ観光学部 教授)

これまでの会計・監査分野における経験を活かし、シャプラニールの目的達成に向けてお力添えできればと考えております。社会におけるさまざまな課題に対し、問題の根本的な解決をめざす皆さまの姿勢に敬い、活動を推進するために努力を惜しまない所存です。



## 評議員

杉江 千月 (公認会計士)

監査法人勤務やコンサル業務を経て、現在は株式会社ミナトマネジメントで内部監査と総務を担当しています。シャプラニールの自立を支える活動方針に深く共感し、初めての評議員職ではありますが、目標達成のために微力ながらお力添えできればと思っています。



## 評議員

本間 まり子

(早稲田大学 社会科学総合学術院 講師)

1998年に青年海外協力隊としてバングラデシュに派遣されて以来、女性のエンパワメントを中心に国際協力の実務や研究に従事してきました。隊員時代に刺しゅう製品の購入先として幾度も口にしてきたシャプラニールで、初めて評議員を務めることとなりました。

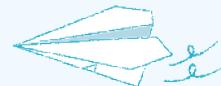


## 評議員

矢部 杏奈

(NPO法人PIECES 職員)

分断が広がる世界において、「私」と「他者」を切り分けるのではなく、「私たち」として存在することが今、市民一人ひとりに求められているように思います。シャプラニールと共に分断のない社会、そして誰も取り残さない社会の実現の一端を担えたらと思います。



思いをカタチに

# 次世代へ 想いをつなぐ 仕組み 「遺贈寄付」とは

特集 想いをつなぐ・変化を生み出すチカラ

「自身が亡くなった際に、財産の一部（または全部）を寄付することを「遺贈寄付」といいます。

遺贈寄付は、生涯を通じて大切にしてきた思いを次世代につなぐ手段です。そして12月は寄付月間「Giving December」です。あなたも一緒に寄付について考えてみませんか？

## 遺贈寄付の種類と方法

遺贈寄付の主な方法は、3つあります。

### ① 遺言による寄付

遺言書に寄付の意思を示しておくことを指します。遺言書には、公正証書で作成する「公正証書遺言」と自身で作成する「自筆証書遺言」があり、確実な執行を望む場合には公正証書遺言がおすすめです。

### ② 信託や保険など契約による寄付

死因贈与契約や生命保険、または信託銀行などの契約の際に贈与先・寄付先を指定しておくもので、信託による寄付は徐々に広がっていますが、死因贈与契約や生命保険の方式はまだ一般的ではないのが現状です。

### ③ 相続財産の寄付

本人ではなく相続人が寄付をする方法です。生前に本人が手紙やエンディングノートなどでその意思を残しておくこともできます。（詳細は裏表紙をご覧ください）

### 〈事例のご紹介〉



弟の想いを、  
未来につなげたい

東京都 山西 洋子さん(仮名)

亡くなった弟から相続した財産を寄付しました。弟自身も生前シャプラニールに寄付をしており、私もボランティアとしてかかわっています。弟もきっと喜んでくれていると思います。活動に役立ててもらえたなら、とても嬉しいです。

しかしながら、日本の遺贈寄付額が397億円に対し、イギリスでは4217億円、アメリカでは4兆4735億円にものぼっています。寄付文化や税制など要因の違いはあれど、上記のような理由から今後は日本でも遺贈寄付が増加するといわれています。

日本国内における遺贈寄付の件数は、ここ10年間ほどで3倍近くに増加し、年間約1000件に成長(国税庁、2023年)。相続人がいない場合、遺産は国庫に帰属するため「それならば最後に自分らしく社会のために役立てたい」と思う方も少しずつ増えているようです。また遺贈寄付はご本人が亡くなった後に行われる寄付であるため、現在の生活資金に影響がないという点も選択される理由の一つです。

日本国内における遺贈寄付の件数は、ここ10年間ほどで3倍近くに増加し、年間約1000件に成長(国税庁、2023年)。相続人がいない場合、遺産は国庫に帰属するため「それならば最後に自分らしく社会のために役立てたい」と思う方も少しずつ増えているようです。また遺贈寄付はご本人が亡くなった後に行われる寄付であるため、現在の生活資金に影響がないという点も選択される理由の一つです。

日本国内における遺贈寄付の件数は、ここ10年間ほどで3倍近くに増加し、年間約1000件に成長(国税庁、2023年)。相続人がいない場合、遺産は国庫に帰属するため「それならば最後に自分らしく社会のために役立てたい」と思う方も少しずつ増えているようです。また遺贈寄付はご本人が亡くなった後に行われる寄付であるため、現在の生活資金に影響がないという点も選択される理由の一つです。

日本国内における遺贈寄付の件数は、ここ10年間ほどで3倍近くに増加し、年間約1000件に成長(国税庁、2023年)。相続人がいない場合、遺産は国庫に帰属するため「それならば最後に自分らしく社会のために役立てたい」と思う方も少しずつ増えているようです。また遺贈寄付はご本人が亡くなった後に行われる寄付であるため、現在の生活資金に影響がないという点も選択される理由の一つです。

日本国内における遺贈寄付の件数は、ここ10年間ほどで3倍近くに増加し、年間約1000件に成長(国税庁、2023年)。相続人がいない場合、遺産は国庫に帰属するため「それならば最後に自分らしく社会のために役立てたい」と思う方も少しずつ増えているようです。また遺贈寄付はご本人が亡くなった後に行われる寄付であるため、現在の生活資金に影響がないという点も選択される理由の一つです。